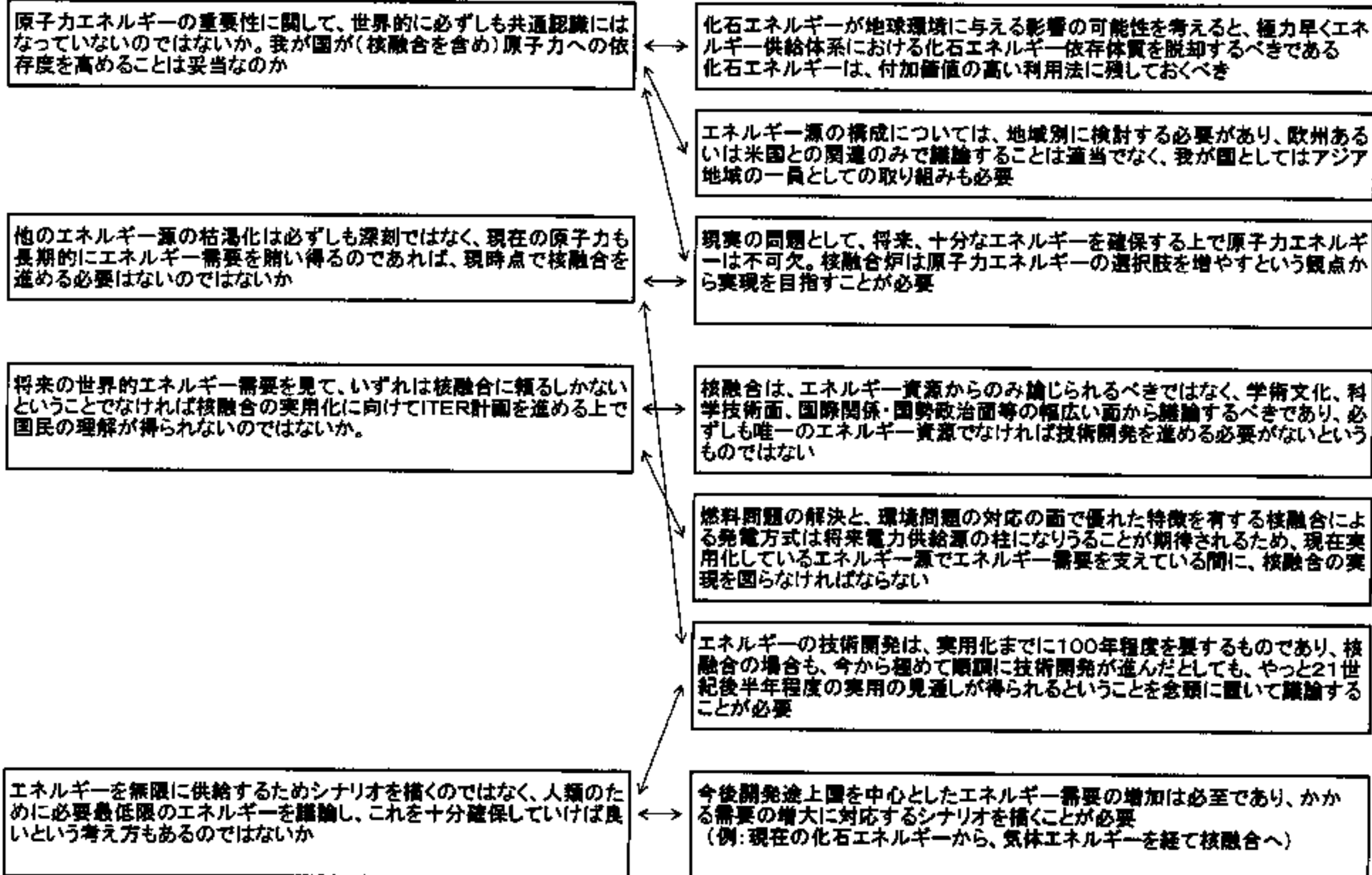


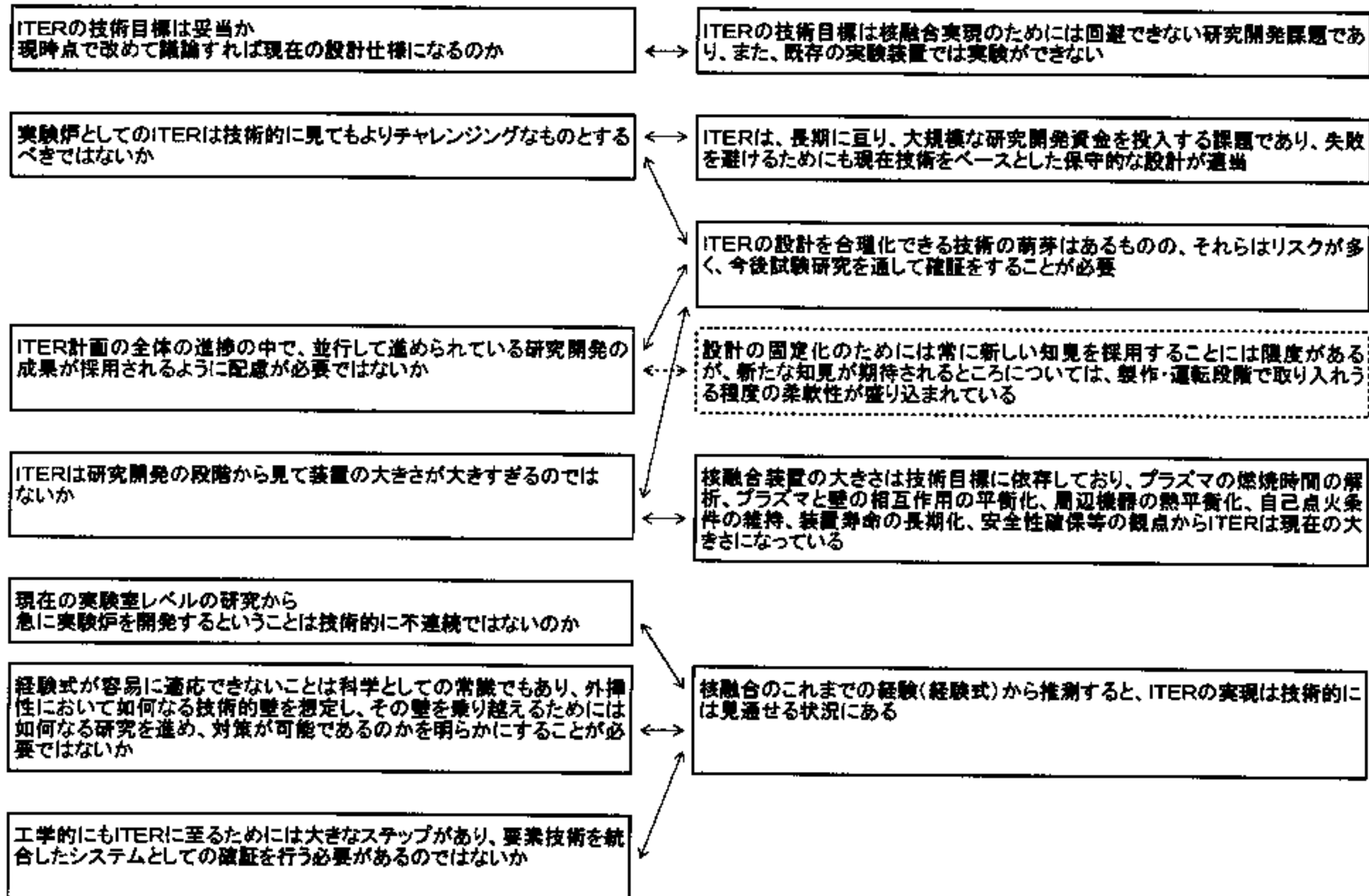
**これまでの検討の状況
(ドラフト)**

平成9年6月17日

エネルギー資源と核融合との関連



ITERの技術的課題と目標



研究開発の戦略論

将来ある時点では現在のエネルギーが枯渇するかもしれないことを想定し、そのときに備えて、誰かがやらなければならない課題であるという観点に立って、基礎的段階の研究としてのITERに取り組むという判断もある

核融合エネルギーの実用化に向かって原型炉から実証炉へと進むことの可能性を含め全体スケジュールの実現性を議論した上で、ITER計画の取り組みを議論するべきではないか

核融合エネルギーが実用化できるか否かについてはITERによってできるだけ早く実際に実証することが必要ではないか

材料研究開発を含め、原型炉、実証炉、実用炉へとつながっていく技術開発戦略の中で、次の段階の装置がどのような機能を果たすべきであるのかという観点からは、現在のITER計画が唯一の計画であるのか疑問

長期的な取り組みが必要な計画に対し、複数の道筋が可能であろうが、現実的には、全体としての研究開発資源、研究開発の効率性、スケジュールの適切さ等に依るのではないかと。この意味で、ITER計画は、エネルギー実用化までの全体を通じた資金規模が小さいように配慮されたものである

ITERは四極が均等に貢献して行ってきた設計活動の時点と、均等貢献が現実的でない建設段階とでは、異なった設計思想(立地国の考え方を多く採用した設計思想)を採用するべきではないか

ITERは国際協力で行うことが前提であり、これまで国際的に合意してきたところをベースにした議論が現実的

国際協力で行う実験炉計画と我が国独自で行う場合の実験炉計画とは異なる計画になるのではないかと

ITER計画と我が国実験炉との関係については、核融合会議において「ITER計画を我が国実験炉として位置付け開発することが適当」との議論あり

大きなリスクが予想される研究開発に関し、当初の想定からはずれた場合にどう対応するべきであるのか、あるいは対応する可能性があるのか検討しておく必要がある

核融合研究をITER計画に特化するのではなく、大学を含め広いバックアップ体制、周辺技術開発体制等の全体を検討することが必要

核融合がこれまで急速に進展してきた理由の一つは、競争がうまく働いてきたものであり、ITERのように唯一の装置では競争過程が抜けてしまい優れた成果が出にくいのではないかと

ITER計画においても
・設計過程における競争過程の導入
・運転チーム毎の競争過程の導入
が可能

我が国へのITER誘致の意義

